

山と自然のサイエンスカフェを終えて

Report

日時：2026年2月13日(金)

17:30～19:00

会場：くらしふと信州(オンライン参加併用)

参加者：48名(対面、オンライン参加合計)



▲▼山カフェの実会場の様子



ボランティアによって実施されている火打山におけるライチョウの生息環境改善事業の様子

「ライチョウ保全に登山者ができること」というタイトルで、第67回山と自然のサイエンスカフェを実施しました。くらしふと信州を会場として対面のみで実施した昨年度のサイエンスカフェでは、長野市在住の方を中心にご参加いただいていた。しかし、今回は対面とオンラインの併用(ハイブリッド)方式にすることで、中信や南信地域、さらには関東地方や北海道等県外から、最終的には対面12名・オンライン36名の合計48名と、多くの方にご参加いただきました。

講演はいくつかのセクションに分けながらその都度質問に答える形式で進めました。尾関主任研究員による軽快な司会進行で、オンライン参加の方からも、チャットを中心に多くの質問をいただくことができました。こちらから一方的に話し続け最後に質疑を行う講演形式とは異なり、参加者と双方向にコミュニケーションを取りながら進むのはサイエンスカフェならではの実感しました。ライチョウの基本的な生態から、私が過去に取り組んできた研究や、研究所に着任してから実施してきたこと、そして参加者の皆様と共有したかった課題感。どこまでうまく伝えられたかわかりませんが、話題提供者としても新たな気づきを得ることができ、充実した会となりました。

今回の大きなテーマはタイトルの通り登山者が如何にライチョウ保全に関わることができるかでした。例えば高山という非常にアクセスの困難な場所に生息するライチョウの生息状況を把握するために登山者が果たす役割は大きくなっています。かつては報告者側も写真を現像したり、観察場所を記述したデータを郵送又はメールしたりと大きな手間がかかっていましたが、テクノロジーの進歩により効率的かつ科学的にも信用性の高いデータを収集できるようになってきています。これからは登山者が収集したライチョウの情報が、保全の基礎データとなる未来が近づいていることを紹介しました。だからこそ、今後は登山者の振る舞い(ライチョウの観察や登山のルール徹底)が重要になってきます。

次回以降もハイブリッド方式を継続するかはまだわかりませんが、遠方からも参加しやすいのは大きな利点です。今回の反省点も生かし、開催方法を検討します。最後になりましたが、参加いただいた皆様には、この場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

(小林 篤/自然環境部)